Osaka University Knowledge Archive

Title	宮崎の「無アクセント方言」の談話音調 : 青島地区の場合
Author(s)	郡, 史郎
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 17-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91571
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

宮崎の「無アクセント方言」の談話音調
–青島地区の場合–

郡 史郎

要旨　宮崎市の青島地区の談話イントネーションについて，明治生まれの話者による実態を音響分析と聴覚判断を併用して調査した。結果として，自然談話における声の高さの動きは，文節ごとの高さの動きの方向性として単調下降型，単調上昇型，平坦型という３種の音調型と，文節の冒頭や末尾にあらわれる境界音調に分解することができる。これは同市清武町の明治・大正生まれの話者の実態の検討結果と同じである。しかし，境界音調の種類とその使用頻度については両地点で違いがあり，青島では清武にくらべて冒頭上昇が多く，末尾上昇が少ない。また，青島には末尾下降があるのが特徴で，特に男性話者に多い。音調型の使いかたについては，青島の男性話者が平坦型を多用し，特にポーズ節の冒頭で多く，文末で少ないが，これは青島の女性話者や清武の男性・女性話者と異なる。これは地域性というよりも個人的特徴の可能性がある。青島と清武に共通する高さの動きの特徴として，各文節はその内部で急な高さの変化をさせないという意味で「平板的」に言うことが求められるが，談話のなかでは青島の男性話者以外，各文節をもっぱら下降傾向で，ときには平坦に，そしてときには上昇傾向で発音し，それらの末尾や冒頭に上昇または下降を適宜つける形になっている。終助詞類と間投助詞は固有の高さの動きを持つ。青島の男性話者は平坦型の使用も多いが，平坦型のあとに下降型は続きにくいことから，この２型の選択はランダムになされているわけではないようだ。高さの動きを左右する要因として意味の限定関係とフォーカス，感情があるが，意味の限定関係の影響力はあまり大きくなく，音調型と境界音調というふたつの音調要素の使いかたの自由度は，青島では清武よりもさら高いように思われる。

1　はじめに

東京方言や大阪方言などでは「雨」と「飴」のように同形の単語の区別を音の高さでおこなうことができる。おおまかな音の高低の動きを線の高低であらわすと，東京の「雨」は［ア|メ］，「飴」は［ア|メ］，大阪の現在の主流はそれぞれ［ア|メ］［アメ］と言いわける。このような単語ごとの音の高さの動きのパターンをアクセントと言うが，各単語がそれぞれに固有のアクセントで発音されることを特徴とするこうした方言を「有アクセント方言」と呼ぶ。

これに対し，そうした区別ができないいわゆる「無アクセント方言」が南東北から北関東にかけての地域や九州の中部・南部などにある。そうした方言では，かりに［ア|メ］と言ったとしても［アメ］と言ったとしても，それによって指す単語が変わるということはない。

ところが，いわゆる「無アクセント方言」でも文を読み上げる際や会話には地域ごとに独特の声の高さの動き（音調）の特徴，つまり独特のイントネーションがあり，また世代差も存在するようである。筆者は，各地の無アクセント方言におけるイントネーションの様相を知るべく，これまで九州の熊本（文の読み上げ）と宮崎（会話）の音調について，どのような特徴があるのか，どのような要因で声の高さの動きが決まるのかを調べてきた。

前稿「宮崎清武町における『無アクセント方言』の談話音調」（郡 2022）では，日向方言の中部地域にあたる（現）宮崎市清武町の明治・大正期の生まれの話者による会話資料（以下「清武談話」と略称）の分析をおこなった。結果として，清武談話には基本的に文節ごとに高さの動きの方向性として単調下降型，単調上昇型，平坦型の３種のいずれかの動き（音調型）があり，それが文節の最後での上昇と冒頭での上昇という境界音調と組みあわせて使われていると記述できること，そして意味の限定関係とフォーカス，意味的なまとまりや感情が音調型や境界音調の選択を左右していることを述べた。

２　本稿の目的

本稿では，日向方言の中部地域の談話イントネーションについてさらに詳しく知るため，前稿の清武町今泉から南東方向に直線距離で約 10km 離れた宮崎市青島地区（1951 年に旧宮崎郡から宮崎市に編入）での状況を，明治生まれの話者による会話資料（以下「青島談話」と略称）を使って，清武談話と同じ手法を用いて調査する。

青島地区を選んだのは，国立国語研究所（編）『全国方言談話データベース　日本のふるさとことば集成』第 18 巻「福岡・大分・宮崎」（国書刊行会刊行）に収録された談話があるためである。会話の収録担当，文字化と解説は，『宮崎県史・資料編・民俗 2』で方言の解説も担当されている比江島修一氏である。

話者は 1899 年生まれの男性と 1909 年生まれの女性で，録音されたのは 1981 年である。司会者として登場する湯地安美氏も青島のかたのようだが，発言量はごくわずかであるため本稿での分析の対象とはしない。なお，清武談話で分析の対象としたのは 1890 年（男），1902 年（女），1914 年（女）のそれぞれの生まれの話者で，ふたつの談話の話者は世代的に近い。この青島談話には合計 22 分半ほどの会話が収録されているが，その前半の約 12 分，男性話者が現役で漁師をしていたときを話題とした部分について検討する。

この青島談話を聞くと，清武談話よりもずっと平板的な話しかたであるような印象をまず受ける。ただ，青島談話では男性話者の発言量が多く，清武談話では女性話者の発言量が多い。清武談話でも男性話者は平板的な話し方がめだつことから，上記の印象は男性が平板的な話し方をしがちなことによるものかもしれない。あるいは，もともとの主たる生業が農業（清武）か漁業（青島）かという地域性の違いもあり，音調の特徴自体にも違いがある可能性はある。

３　高さの動きのとらえかた

前稿の清武談話については，先にも述べたように基本的に文節ごとに高さの動きの方向性として単調下降型，単調上昇型，平坦型の３種のいずれかの動き，すなわち音調型があり，それ

が文節の末尾での上昇と冒頭での上昇という境界音調と組みあわせて使われていると考えたが，それはこの青島談話にも基本的にあてはめることができるように思われる。

ただし，前稿と違い，本稿の青島談話では文節の最後からその次の文節の冒頭に向けての下降が何度も出てくるので，これを「末尾下降」として境界音調のひとつとしてとりあげる。もしこの音の動きは次の文節を低い音からはじめるためのものだと解釈するならば別の名称がふさわしいかもしれない。あるいは機能として先行文節に属すると言うべき場合と，後続文節に属すると言うべき場合のふたつを区別するのがふさわしいということがあるかもしれないが，今は区別せずまとめて仮に「末尾下降」と呼んでおく。

このタイプの高さの動きが清武談話にまったくなかったわけではないが，非常に少なく，また感情表現や言いよどみ，引用の助詞，疑問詞にともなっているものが多く，一定の表現機能をになう音調のように思われたわれため，前稿では境界音調として扱わず「アクセント的下降」という名称のもとに表現機能との関係を検討した。しかし，青島談話にはこの末尾下降がかなり多くあらわれ，また特定の形式や表現機能との強い結びつきもないように思われたため，境界音調とみなすことにする。

青島談話の典型的な高さの動きの例を図 1 と図２に示す。図では縦軸が高低をあらわすが，目盛は 50Hz を基準(0)とした半音値で，人間の通常の声域をほぼカバーする 24 半音分 (2 オクターブ）を示している。横軸は時間で，目盛は秒である。図と本文でのカタカナ表記と標準語訳は『日本のふるさとことば集成』の比江島修一氏によるものを使用する。

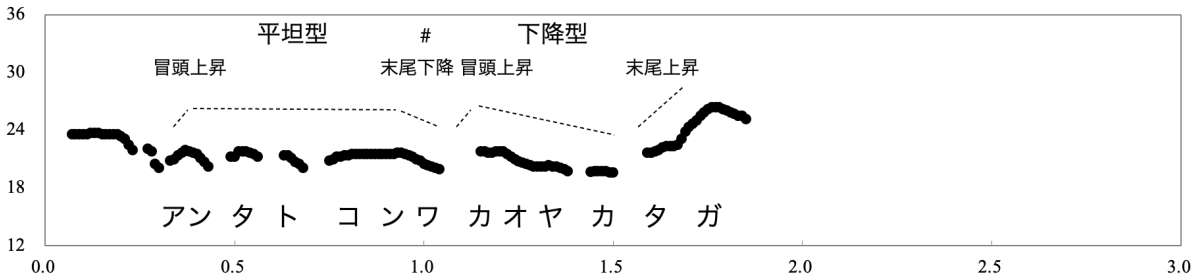

図１ 男性話者「あなたのところの若親方×」

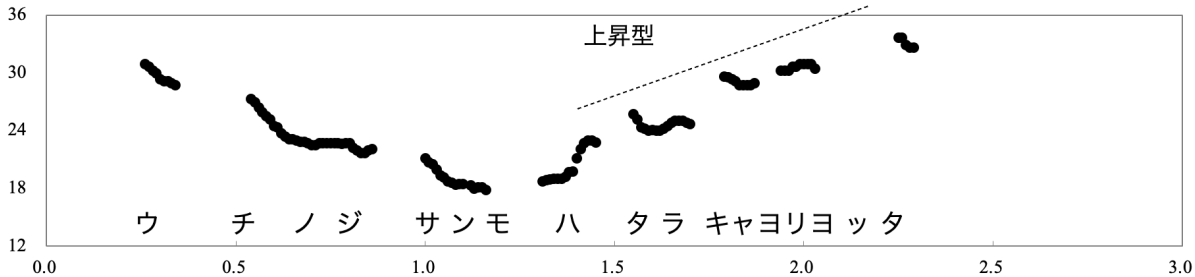

図２ 女性話者「うちのおじいさんも働かれていた」

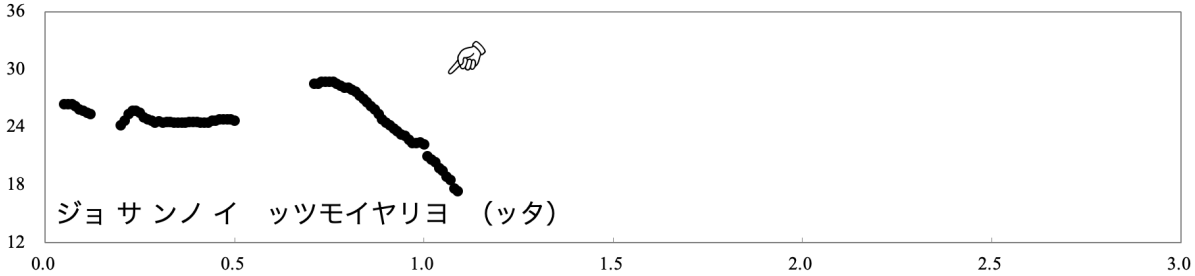

図３ 男性話者「おじいさんはいつでも言っておられた」

このほか，東京方言などの下降アクセント核の実現のような急で大きな下降もあるが，図３に示す例のようにそれはもっぱら文末部に限られる。図３の例は下降型に分類したが，文節の途中から下降する場合は，その文節は別の音調型と下降型からなる複合型として処理した。

なお，高さの動きを分類する単位として，前稿と同じく補助動詞をその直前とあわせて１文節をなす１単位と考えた（理由については前稿の注 10 を参照）。補助動詞や複合語の各単位が音調的な独立性を持っていることがあるが，それについては 4.5.1 節で述べる。

３つの音調型と３つの境界音調の詳細は以下のとおりである。

●単調下降型：略称「下降型」

分節音の影響によるでこぼこはあっても，それを捨象するとおおむね単調に下がる動きになっているもの。１秒で２半音程度以上の割合で低くなるものとする。

●単調上昇型：略称「上昇型」

分節音の影響によるでこぼこはあっても，それを捨象するとおおむね単調に上がる動きになっているもの。

●平坦型

分節音の影響によるでこぼこはあっても，それを捨象するとおおむね平坦な動きになっているもの。

●文節冒頭での上昇：略称「冒頭上昇」

●文節末での段上昇：略称「末尾上昇」

段上昇とは一段高くなってそのままの高さをおおむね保持するようなタイプの上昇で，筆者の東京方言の末尾音調の分類では「強調型上昇調」と呼んでいるものである（郡 2020）。東京方言などの疑問文末にあらわれるような直線的に上がりつづけるタイプのもの（郡 2020 の「疑問型上昇調」）ではない。段上昇の上昇開始は末尾音節の冒頭付近からがほとんどだが，そのひとつ前の音節からのこともある。上昇が後続文節の冒頭まで続くこともよくある。

●文節末での下降：略称「末尾下降」

末尾音節の内部，ときとして末尾音節の冒頭付近からの小下降。前稿の清武談話では前述の理由により境界音調の扱いをしていない。

音調型の判断は Praat を利用した音響分析と聴覚を併用しておこなったが，文節が短いために音調型が判断できない場合は「判断保留」とする。

4　高さの動きの特徴

以下では，前稿と同じく，ふたつ以上の文節が間にポーズをはさまないで続いている発言をとりだし，その各文節の音調型とその組み合わせの特徴について検討する。ここでは，他の話者の声との重畳の分離がむずかしく，音高の正確な観察・測定が困難な箇所は検討対象からはずす。結局，合計 790 文節が検討対象となったが，そのうち男性話者が 558 文節，女性話者が 232 文節で，男性話者のほうが多い。この談話では高さの動きの特徴が話者によって異なるので，以下ではもっぱら話者ごとに説明する。清武談話との相違点についても触れてゆく。

4.1 音調型の数から見た全体的な特徴

本稿では各文節での高さの動きの方向性を３つの音調型に分けているが，ひとつの文節が複数の音調型からなると判断した場合がわずかにある（全体の 5%）。それについては別に考察することとし，まず 1 文節が 1 音調型の 752 例（男性話者 533, 女性話者 219）について検討する。

ここでは使われる音調型の割合が話者によって異なる。図４に示すように男性話者は下降型（45%）と平坦型（40%）の割合が拮抗しているが，女性話者は下降型の文節がずっと多い（65% 対 15%）。清武談話ではどの話者も下降型が多く平坦型が少なかった。ただし，青島でも下降型と平坦型の２型をあわせると男性 85%，女性 80%であり，清武の資料全体での 87%とほぼ同じ使用頻度になる。これは，下降型と平坦型が単なる変異形の関係にある可能性を思わせる。

この青島談話では男性話者の発話量の多さにひきずられる形で談話全体での平坦型の割合が清武談話よりもずっと多くなっている（33% 対 10%）。青島談話が清武談話よりも平板的な

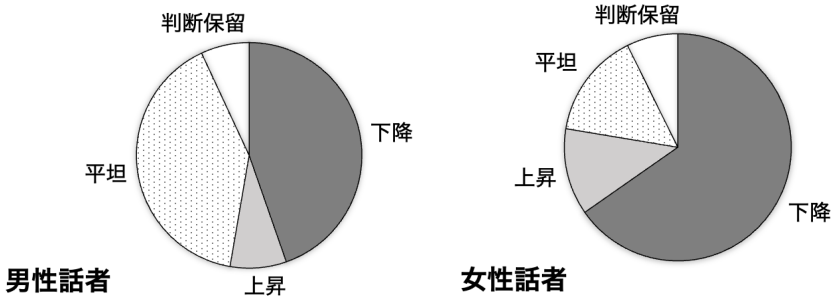

図４　話者別の音調型の割合

話しかたであるように筆者が感じたひとつの原因がこれであろう。

上昇型の割合は男性話者 8%，女性話者 12%で大差なく，清武談話でも資料全体で 10%なので，これについては両地点で同じような状況になっている。

4.2 それぞれの音調型の使われかた

前節で見たように，使われる音調型の割合，特に下降型と平坦型の割合が話者によって大きく異なる。下降型か平坦型かについては選択の自由度が高いということになるだろうが，文内や談話内での機能に応じた使い分けはまったくないのだろうか。

以下では，音調型の選択と関係するかもしれない特徴のうち数値化がしやすいものとして，その文節が「提題文節」であるかどうか，副詞節，並列節といった「節」の末尾であるかどうか，（文法的な）文末であるかどうか，そして，ポーズ段落の冒頭，つまりポーズを置いたあとの発言の最初の文節であるかどうかと音調型の使用割合の関係を検討する。

4.2.1 提題文節との関係

助詞の「ワ（は）」などがついて文の主題の働きをする提題文節とそれ以外の文節における各音調型の割合をまず見てみる。提題の助詞「ワ」はこの談話では「シター（人は：シトワの例もあり）」「ムカシャー（昔は）」「ニンゲンナ（人間は）」「トキニャ（時には）」のように直前と融合していることが多い。

結果をまとめたのが表 1 だが，提題文節かどうかで使われる音調型の割合が異なるということはなさそうである[1]。

4.2.2 節末での使われかた

次に，文法的な切れ目の大きさとの関係を見るために，文末ではない文節で，後続文節との間の文法的な切れ目が相対的に大きなもの，すなわち副詞節（条件節含む）または並列節の末尾にある場合の各音調型の使われかたを検討する。節末であっても切れ目が相対的に小さい連体節，補足節，引用節の場合は含めない。

結果をまとめたのが表 2 だが，副詞節または並列節の末尾かどうかで音調型の使われ方が異なるということもなさそうである[2]。

4.2.3 文末での使われかた

次に，文法的な文末になっている文節かどうかで音調型の使われかたに違いがあるかを見る。条件をそろえるために，直後にポーズがある場合にかぎって比較をおこなう。終助詞類がつい

---

1) 下降・上昇・平坦の 3 型の使用割合について正確確率検定をほどこすと，男性話者で $p=0.647$，女性話者で $p=0.670$ と，提題かどうかで使用割合に統計的に有意（$p<.05$）な差はないという結果になった。

2) 下降・上昇・平坦の 3 型の使用割合について正確確率検定をほどこすと，男性話者で $p=0.958$，女性話者で $p=0.256$ と，節末かどうかで使用割合に統計的に有意な差はないという結果になった。

表１　提題文節と音調型の割合の関係

	男性話者				女性話者			
	提題文節		その他の文節		提題文節		その他の文節	
下降型	19	46%	219	42%	17	77%	126	60%
上昇型	5	12%	38	7%	2	9%	25	12%
平坦型	17	41%	198	38%	2	9%	31	15%
分類保留・複合音型	0	0%	62	12%	1	5%	28	13%

表２　節の末尾と音調型の割合の関係

	男性話者				女性話者			
	副詞節・並列節の末尾の文節		その他の文節		副詞節・並列節の末尾の文節		その他の文節	
下降型	31	45%	207	42%	11	73%	132	61%
上昇型	5	7%	38	8%	1	7%	26	12%
平坦型	26	38%	189	39%	0	0%	33	15%
分類保留・複合音型	7	10%	55	11%	3	20%	26	12%

表３　文末と音調型の割合の関係

	男性話者				女性話者			
	ポーズ前の文末		ポーズ前の非文末		ポーズ前の文末		ポーズ前の非文末	
下降型	31	54%	46	45%	28	70%	19	73%
上昇型	5	9%	5	5%	4	10%	0	0%
平坦型	10	18%	39	38%	1	3%	3	12%
分類保留・複合音型	11	19%	13	13%	7	18%	4	15%

ている場合も含める。なお，直後にポーズがあっても文末ではないというのは，それが後置文節か，言いさしている場合か，別話者との発言が重なって音調型の判断ができない場合である。

結果をまとめたのが表３である。ここでは，文末かどうかによる違いが男性話者にはありそうである[3]。具体的には，平坦型の使用率が文末で少ない[4]。

文末では平坦型が相対的に少ないというのは直感に反する結果ではないが，女性話者にはそうした傾向が特に見られないことが気になる。理由として，そもそも女性話者は平坦型をあまり使わず下降型が多いということがあるだろうが，ここで検討したのはあくまで「型」の使用率に違いがあるかどうかという点であることも考慮する必要がある。同じ下降型であっても，文末では下降のしかたが大きいという可能性はある。

そこで，文末の文節とその直前の文節（次文末文節）がともに下降型になっていて，両者の間

3) 下降・上昇・平坦の３型の使用割合について正確確率検定をほどこすと，男性話者で p=0.033，女性話者で p=0.115 だった。

4) 残差分析の結果では，調整済み標準化残差 2.482, p=0.013 と統計的に有意なかたよりがある。

にポーズ，境界音調や間投助詞が入っていない場合について，下降の大きさを該当区間の高さの動きを直線的に近似することで 1 秒に何半音下がるかという下降率の形にして比べてみた。ただし，該当する事例は両話者あわせて 19 例，そのうち女性話者は 4 例のみと少ない。下降率の分布をヒストグラムで示したのが図 5 である。ここでは話者をまとめて示している。

この図から，25 半音/秒以上の大きな下降があることがわかるが，これらは文末文節のものである[5]。また，相対的に小さい下降は次文末に多い傾向もうかがえる。しかし，ひとつひとつの発話ごとに比べると文末の方が下降が小さいケースもあるため，全体として見ると次文末か文末かで下降型の下降の大きさに差はないようだ[6]。女性話者の 4 例だけを見ても，文末の方が下降が大きいケースが 2 例，ほぼ同じケースが 1 例，小さいケースが 1 例とさまざまである。

4.2.4 ポーズ段落の冒頭での使われかた

最後に，ポーズ段落の冒頭，つまりポーズを置いたあとに再開される発言の最初の文節であるかどうかとの関係を検討した。

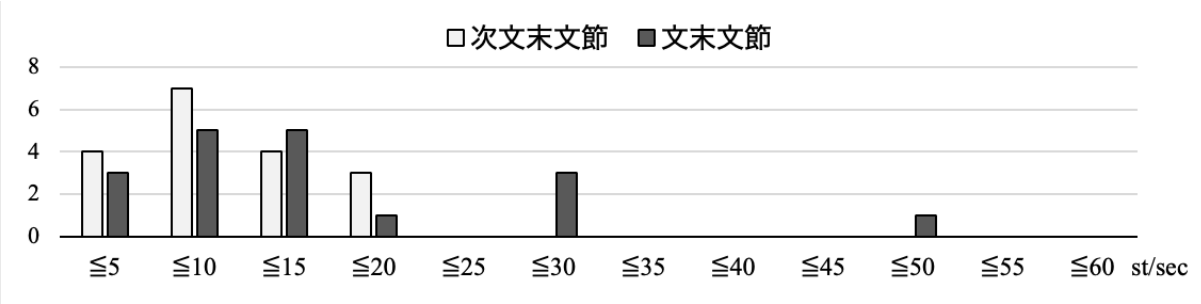

図 5 文末の文節とその直前の文節（次文末文節）での下降率

表 4 ポーズ段落の冒頭と音調型の割合の関係

	男性話者				女性話者			
	ポーズ段落の冒頭文節		その他の文節		ポーズ段落の冒頭文節		その他の文節	
下降型	58	36%	180	45%	39	59%	104	63%
上昇型	10	6%	33	8%	9	14%	18	11%
平坦型	78	49%	137	34%	12	18%	21	13%
分類保留・複合音型	14	9%	48	12%	6	9%	23	14%

5) 具体的には，男性話者の［ジョサンノ］イッツモ イヤリヨッタ（おじいさんはいつでも言っておられた），［ムジュンシチョッ］トコガ アット［ヨナ］（矛盾しているところがあるのよね），女性話者の［ゼンゼン モー］オラン ゴツナル［ワナ］（全然もういないようになるよね），女性の［ヨソン シトオバ ギョーサン］モゾガカッ トコジャ［ジナ］（よその人を非常にかわいがるところだがね：文末とみなした）。

6) 対応のあるデータに対する t 検定の結果は t = -1.78, df = 18, p = 0.092。

結果をまとめたのが表４である。ここでは，男性話者には違いがありそうである[7]。具体的には，ポーズ段落冒頭ではその他の位置よりも下降型の割合が少なく，平坦型の割合が多い[8]。

4.2.5 上昇型と感情表現のむすびつき

上昇型が使われる文脈を見ると，感嘆や驚きなどの気持ちを込めた発言になっている例が目につく。それらは上昇量も大きい。これらの点は清武談話と同様である。それに下降が続く場合も下降は大きい。ただ，感嘆などの気持ちを込めた箇所すべてが上昇型になるわけではない。

典型例として，男性話者の ヒトジャッタラ メワ サメンワー（(普通の)人だったら目は覚めないよ：ヒトジャッタラでごく低い声域まで下げたあと上昇型が続き，そこで 7.0 半音上昇），ワタシー イヤッタッチャカリ モー（私に言われたのだから：5.0 半音上昇），女性話者の モノスゴ リョーシヤッタヨー（ものすごく漁をされたよ：6.4 半音上昇），ウチノ ジサンモ ハタラキャヨリヨッタ（うちのおじいさんも働かれていた：ハの最初からは 15.6 半音上昇：図２参照），ナニ イーナットナ アンタ マタ（なに［を］いいなさるのか あなた［は］：ナニは上昇型で 6.9 半音上昇するが，そのあと下降型が連続して 19.4 半音下降）のそれぞれ下線部がある。

感嘆などの気持ちを込めた発言で上昇型をとらない例もある。たとえば女性話者の モー ホンーノ イザケデナ（もう本当に祝いでね：ホンでの 8.6 半音の冒頭上昇のあとノの最後まで平坦）。

4.3 境界音調

4.3.1 冒頭上昇

文節の冒頭に上昇がつく文節は男性話者で全体の 20%，女性話者で 28%で，清武談話の資料全体での 14%という割合より多い。また，青島では下降型の文節全体の中で冒頭上昇がつくものの割合が男性で 31%，女性で 49%，平坦型では男性で 41%，女性で 58%と音調型によるかたよりはさほど大きくないが，多くが下降型の文節についていた清武とはこの点でも異なる。

青島談話での冒頭上昇の多くは，図６に示すように 3 半音以下の小さい上昇である（ここではポーズなしで先行する文節がある場合にその末尾から測定できた上昇量のみを示している）。清武でも小さい上昇が多かったので，この点は両地点共通である。

ただし，強調がある場合は男性話者の ジョサンノ イッツモ イヤリヨッタ（おじいさんはいつでも言っておられた：下線部で 3.9 半音上昇），女性話者の ムカシャ ホンデン リョーガ アリヨッタケンド（昔はそれでも漁があったけれど(今は…)：下線部でそれっぞれ 9.0, 4.4, 7.9 半音上昇），

---

7) 下降・上昇・平坦の３型の使用割合について正確確率検定をほどこすと，男性話者で p=0.012，女性話者で p=0.417 となった。

8) 残差分析の結果では，調整済み標準化残差と p 値は，下降型は -2.350，p=.019，平坦型は 2.989，p=.003 と統計的に有意なかたよりがある。

モー ホンーノ イザケデナ（もう本当に祝いでね： 下線部で 8.6 半音上昇）のように比較的大きな上昇が使われる。

4.3.2 末尾上昇

終助詞類や間投助詞にともなうものをのぞき，文節末に段上昇がつく文節は男性話者で全体の 16%，女性話者で 8%に見られた。清武談話は資料全体で 31%なので，それよりずっと少ない。また，清武談話では多くが下降型の文節についていたのに対し，青島では男性が下降型の文節全体の中で末尾上昇をつける割合が 18%，平坦型で 22%と大きなかたよりはなく，女性は下降型で 7%，平坦型で 27%と，むしろ下降型での割合が少ない。

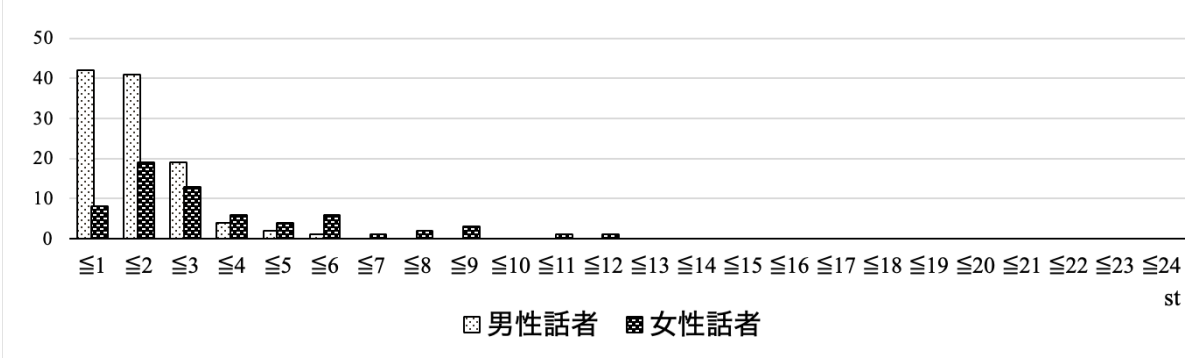

図６　冒頭上昇の大きさ

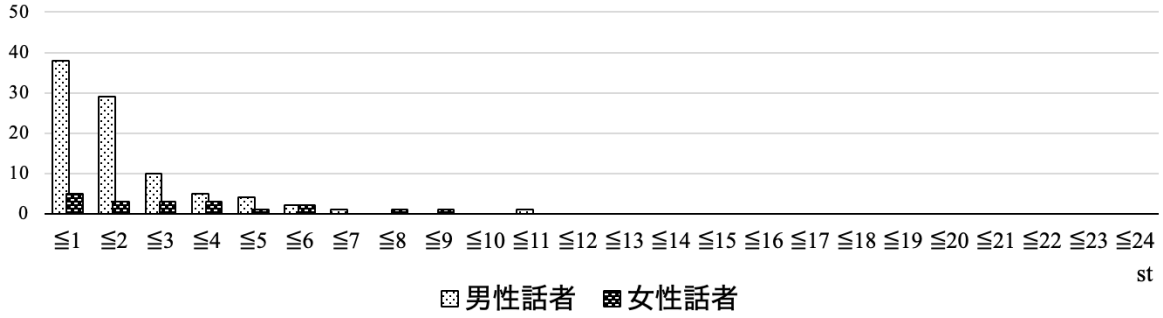

図７　末尾上昇の大きさ

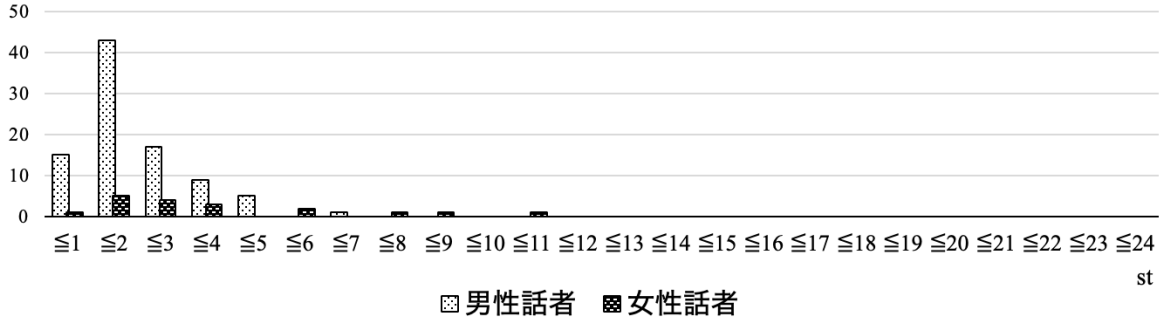

図８　末尾下降の大きさ

上昇の大きさは清武談話では 1 半音未満から 23 半音までと幅が広く，5 半音未満のものとそれ以上のものに分かれる分布だったが，青島では図 7 に示すようにごく小さいものが多い。

清武では提題文節には末尾上昇が多いということがあり，また，上昇の大きさは伝えたい気持ちが強い場合，述語文節の直前，感嘆の気持ちがある発言・興奮しての発言では大きい傾向があるなど，大きさの使い分けがありそうだった。青島では提題文節につく末尾上昇は逆にほとんどなく，男性の 2 例のみである。上昇の大きさについては，伝えたい気持ちが強い場合（フォーカスがある場合）と感嘆の気持ちがある発言・興奮しての発言には比較的大きな末尾上昇が見られる。たとえば，男性話者の イーツ タベント（いいのを食べないと：下線部で 5.9 半音上昇），イェイヨー トッチョリャルカリ（栄養をとっておられるから：4.5 半音），女性話者の ヨソン シトオバ ギョーサン モゾガッ トコジャジナー（よその人を非常にかわいがるところだがね：8.8 半音），イッシューカン オキ イカンカッタラ モー（1 週間沖［に］行かなかったらもう：7.1 半音）。

4.3.3 末尾下降

文節末での下降については，終助詞類や間投助詞にともなう下降をのぞき，男性話者で全体の 16%，女性話者で 8%に見られた。男性話者は下降型の文節全体の中で末尾下降がつく割合が 9%であるのに対し，上昇型では 33%，平坦型では 27%と，下降型につくものは少ない。一方，女性話者は 3%，4%，21%と，下降型も少ないが上昇型も少ない。図 8 に示すように下降も小さいものがほとんどである。

文節末で上昇してから下降するケースもあるが，それは男性話者で全文節の 4%，女性話者で 1%と，いずれもごく少ない。

4.4 音調型の組みあわせから見た特徴

4.4.1 2 文節が 1 音調句になる場合

たとえば平坦型の文節のあとに境界音調なしにそのまま同じ平坦型の文節が続くならば，その 2 文節はひとつの「音調句」を形成することになる。下降型，上昇型についても同様である。そのようなひとつの音調句を形成する「純同音型の連続」の例が以下のようにある。

「下降型＋下降型」：男性話者 13%　女性話者 13%
「上昇型＋上昇型」：男性話者 2%　女性話者 2%
「平坦型＋平坦型」：男性話者 10%　女性話者 1%

これらをあわせると 2 文節連続全体のうち 23%になるが（清武も 21%と同レベル），青島では女性話者は平坦型がそもそも少ないためか，その連続がほぼない（1 例のみ）。

・音調型の組みあわせに見る意味的な制約（意味的限定とフォーカス）

上のように２文節が１音調句を形成する要因として，清武談話では文節間の意味的な関係，具体的には最初の文節(たとえば「白い花が」なら「白い」)がそれに続く文節の中核となる語(「花」)を意味的に限定しているかどうかに着目し，それが１音調句を形成する要因になっていると考えられることを示した[9]。

今回の青島談話についてもそれはあてはまるようである。意味的な限定関係がある全 303 例（男性 235，女性 68）の２文節連続のうち，１音調句になっている割合は男性話者で 32%，女性話者で 25%である。これに対し，意味的な限定関係がない全 261 例（男性 163，女性 98）の２文節連続のうち１音調句になっている割合は男性話者 15%，女性話者 10％であった。つまり，いずれの話者でも２文節が１音調句になる割合は，その文節間に意味的な限定関係がある場合が，ない場合の約２倍高い。

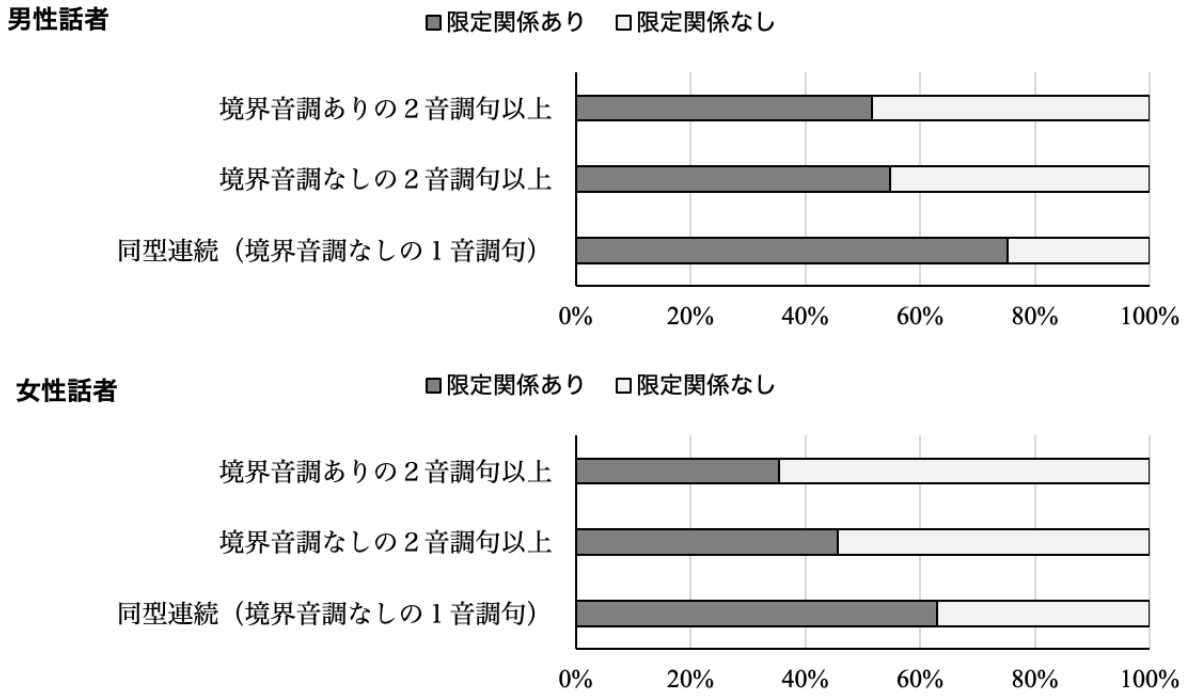

図９　意味的な限定関係と音調句

9) 「意味的限定」とは，筆者が日本語のイントネーションの説明に用いている概念で，ある単語について，それが指し示すものや，それがあらわす動作や状態のありかたを限定する作用を指す。たとえば「花」という単語はそれが具体的に何を指すのかの可能性はさまざまあるが，「道に白い花が咲いていた」と言うときの「白い花」では，他の色の花でも単なる花でもなく白い花だと限定している。これに対して「道に白い雪が積もっていた」と言うときは，「雪の中でも白いもの」という意味で「白い雪」と言っているわけではない。雪はふつう白いからである。つまりこの「白い」は「雪」の意味を限定しておらず，視覚イメージを喚起するためなどの補足的情報になっている。東京方言では「白い花」と「白い花」のイントネーションは通常異なるが，それは意味的限定の有無による。

見方を変えて，1 音調句になっている 2 文節のうちどれだけのものに意味的な限定関係があるかというと，全 128 例 (男性 101，女性 27) のうち男性話者で 75%，女性話者で 63%である。

図 9 には以上の関係を，2 文節が境界音調なしでそれぞれ別の音調型をとる場合 (図の「境界音調なしの 2 音調句以上」：「以上」というのはここでは 1 文節がふたつの音型からなる場合も含めているため）と 2 文節の間に境界音調がある場合の割合とともに示している。この図からも推測できるように，意味の限定関係とかかわるのは境界音調があるかどうかではなく，同じ音型が境界音調なしに続いて 1 音調句になるかどうかである[10]。

意味的限定関係があればかならず 1 音調句になるというわけではない。特に，清武談話では意味的限定関係がある場合に 1 音調句になる割合は資料全体で 47%だったが，青島では資料全体で 31%とかなり低い。しかし，青島でも意味的限定の有無がイントネーションを左右する要因になっており，意味的限定があれば純同音型の連続になりやすいということは言える。

2 文節以上が境界音調をはさまずに同じ音調型で連続する例には，このほか，男性話者の ジョサンノ イッツモ イヤリヨッタ（おじいさんはいつでも言っておられた），ムカシャー イッシェンモ カシテクルッ シター オラジ（昔は 1 銭も貸してくれる人はいなくて）の下線部のような下降型の連続もある。これはフォーカス（ここでは「いっつも」「1 銭も」）があるためにフォーカスのある文節とその後を含めた全体が 1 音調句になった例かと思われる[11]。つまり，フォーカスも談話音調を左右する要因になっているようだ。

4.4.2 男性話者における音調型の組みあわせ

青島の男性話者は，先述のように下降型と平坦型の使用率が全体のそれぞれ 44%，40%と拮抗している。今，文節間に境界音調がある場合も含めて考えると，この話者では談話中で「下降型のあとに平坦型」が続く例が文節連続全体の 9% (34 例)であるのに対し，「平坦型のあとに下降型」が続く例は 16% (63 例）と，後者の方が多いというアンバランスな関係になっている。つまり，下降型のあとに平坦型は続けにくいという制約がありそうである。したがって，平坦型と下降型の選択はまったくランダムなものではないということは言えそうである。

4.5 その他の特徴

4.5.1 1 文節が 2 音調型に分かれる場合

4.1 節で述べたように，ひとつの文節がふたつの音調句からなる場合がわずかながらある。

---

10) 1 音調句か 2 音調句の違いと意味的限定関係の有無の対応について正確確率検定をほどこすと，男性話者で $p<0.001$，女性話者で $p=0.032$ だが，2 音調句であいだに境界音調があるかどうかの違いと意味的限定関係の有無の対応は男性話者で $p=0.699$，女性話者で $p=0.271$。

11) フォーカスがある文節がその直後の文節群とあわせて 1 音調句になる例は東京や大阪でも頻繁に見られる。東京については郡(2020)参照。

それは，補助動詞を含む文節，複合名詞からなる文節・接尾辞を含む文節，サ変動詞からなる文節，助動詞がある文節のように，ひとつの文節が文法的・形態的に一定の独立性を持つふたつの要素からなる場合，そして強調的に使われる２音節以上の助詞を含む場合である。

ただし，そうした文節がすべて２音調句になるわけではない。しかし，こうしたものは音調的に独立しうるということが言える。同様の傾向は清武談話にも見られた。

なお，上記のような場合に，どちらの要素も下降型で，後半の方が大きく下がる例もある。

以下にそれぞれの典型例をあげる。記号｜は音調型の境界をあらわす。

・補助動詞を含む文節

カシテ｜クルルカンナ（貸してくれるからね：平坦＋下降），クーテ｜イコヤト（食べていこうよと：平坦＋境界音調＋平坦），カケ｜チョルワナ（欠けているよね：下降＋下降で後の下降度が大）。

・複合名詞からなる文節，接尾辞を含む名詞からなる文節

キカイ｜シェンガ（機械船が：下降＋冒頭上昇＋下降），サンブンノ｜イチモ（３分の１も：下降＋上昇），ニヒャク｜バリキヤ（200 馬力や：下降＋平坦），ムスコ｜タチガ（息子たちが：下降＋冒頭上昇＋下降），スズキ(?)｜サンヨ（X5 さんよ：下降＋冒頭上昇＋下降）

・サ変動詞からなる文節

ソートー｜スル（相当する：平坦＋下降），ソン｜スンナー（損するね：下降＋下降で後の下降度が大）

・助動詞がある文節

サメン｜ヨッタツ（覚めなかったよ：平坦＋下降），ナン｜ナッドガー（なりなさるだろうが：平坦＋下降），カマエ｜ヤッタガエ（構えられたよ：下降＋下降で後の下降度が大）

・２音節以上の助詞を含む文節

サンジューネン｜グライ（30 年くらい：下降＋冒頭上昇＋判断保留），ジットン｜カンノ（10 トンからの：下降＋冒頭上昇＋下降），ブラク｜カル（集落から：下降＋冒頭上昇＋下降），アリヨッタ｜ケンド（あったけれど：平坦＋下降），キンチャクアミ｜バッカッジャモンナー（巾着網ばっかりだものね：平坦＋冒頭上昇＋平坦）。上のブラク｜カル以下の例は，談話の流れのなかで別ものと対比させるなど，助詞の働きを強調しているケースと思われる。

以上にあてはまらない例もわずかながらある。具体的には，オヤカタ｜ジャモンナ（親方だものね：両方とも下降型で後半の下降度が大），アン｜マリナ（あまりね：下降＋冒頭上昇＋下降）。

4.5.2 終助詞類と間投助詞の音調

文末の述語には多くの場合終助詞類がついており，ほとんどの場合それらは固有の高さの動きを持っている。もっとも多い終助詞ナについては段上昇調（郡 2020 の「強調型上昇調」）と上昇下降調が同数程度になっていて，話者による違いもなさそうである。このほかナには直線的

な連続上昇調（郡 2020 の「疑問型上昇調」）や顕著な下降調（郡 2020），そして特に独自の動きがみとめられない無音調もわずかずつながらある。ワナ，モンナのような複合型ではナはほとんどの場合段上昇調。単独のワも多いが，その音調はさまざまである。ヨは段上昇調か顕著な下降調，ドは段上昇調か直線的な連続上昇調をとっている。ガは顕著な下降調か段上昇調か無音調。モンは顕著な下降調か無音調。

このように終助詞の音調の使いかたには一定の傾向があり，使い分けがあることを思わせはするが，具体的な使い分けかたについては今回の談話資料だけでは知ることが困難である。

文末以外の間投助詞については，特に多いのがナで，これは女性話者は段上昇調か上昇下降調をとるが，男性話者は段上昇調がほとんどである。ヨはすべて顕著な下降調だが，女性話者は 1 例の使用のみ。間投助詞はナかヨかで音調を使い分けているように見える。

4.5.3 裸の文末や裸の文内文節末の音調

終助詞類がつかない「裸」の文末文節もいくつかあって，その最後に動きをともなう例がある。こうした末尾音調の使いかたは東京方言とも共通である。具体例として，オヤカタ（親方：呼びかけで最後のタが上昇下降調），ユーチョリャッタ（言っておられた：伝聞でタが段上昇調）。

また，間投助詞がつかない文内の文節の末尾での例として，（キカンシオ）ヤルシー（機関士をするし）でシーに上昇下降調が，またナカヨクナッテ（仲よくなって）でテにやはり上昇下降調が使われている例がある。これも文内文節末での上昇下降調として東京方言と共通である。

5 まとめと清武談話との比較

前稿に引きつづき，無アクセント方言である日向方言の中部地域の談話のイントネーションについて，今回は（現）宮崎市青島地区の 1899 年生まれの男性と 1909 年生まれの女性による会話資料を使って検討した。結果としてそのイントネーションのしくみが解明できたと言うにはほど遠く，かえって自由度の高さを強く感じさせるものとなったが，今回の分析内容を前稿の清武談話とあらためて対比させながらまとめる。

・基本構造：基本的に文節ごとの高さの動きの方向性として単調下降（下降型），単調上昇（上昇型），平坦（平板型）の３種の音調型があり，それがいくつかの種類の境界音調と組みあわせて使われていると考えられる。その点は前稿の清武談話と同じである。

・音調型の使い分け：３つの音調型のうち，下降型と平坦型の使用頻度は青島談話では話者による違いが大きく，男性には女性より平坦型がずっと多いことが特徴的である。女性は下降型が多く平坦型が少ないが，これは清武談話と共通である。ただし，青島でも下降型と平坦型の２型をあわせるとどちらの話者もほぼ同じ使用頻度になり，清武の資料全体での２型の使用頻度合計とも近いので，この２型は単なる変異形の関係にあることを思わせる。

本稿では型の使い分けについて「提題文節」であるかどうか，副詞節，並列節といった「節」の末尾であるかどうか，文末であるかどうか，そしてポーズ段落の冒頭であるかどうかとの関係を検討した。その結果，男性話者では文末で平坦型が少なく，ポーズ段落の冒頭で平坦型が多いという，文内の位置にかかわる使用傾向の違いが見られた。しかしこれは両話者に共通した傾向ではなく，下降型か平坦型かの選択の自由度は非常に高いように見受けられる。

上昇型は，かならずではないが男性話者でも女性話者でも感嘆の気持ちを込めた発言によく見られる。これは清武でも同様であった。

・音調句（ふたつの文節がひとつの音調句に融合する場合）：同じ音調型を持つふたつの文節が境界音調なしで連続し，全体でひとつの音調句になる場合は，文節間の意味的な限定関係がかかわっている。意味的限定関係がある文節連続は 1 音調句になりやすい。ただし，青島ではその割合は男性話者で 33%，女性話者で 24%と，清武の資料全体で 47%という割合よりも少し小さい。いずれにせよ，意味的限定関係があればかならず 1 音調句になるというわけではない。このほか，フォーカスの後で下降型が境界音調なしで連続する例が見られた。

・音調句（ひとつの文節がふたつの音調句からなる場合）：1 文節が 2 音調型からなる例がわずかながらある。それは，補助動詞を含む文節，複合名詞からなる文節・接尾辞を含む文節，サ変動詞からなる文節，助動詞がある文節のように，ひとつの文節が一定の独立性を持つふたつの要素からなる場合である。また，2 音節以上で強調的に使われる助詞を含む文節もある。かならずではないが，こうした要素は音調的にも独立しうるということになる。同じ傾向は清武談話にも見られた。

・境界音調：清武談話では文節の冒頭での上昇（冒頭上昇）と文節の最後での上昇（末尾上昇）の 2 種類だけで談話の高さの動きを説明できるように思われたが，今回の青島談話では文節の最後での下降（末尾下降）の使用が目立ち，これを独立の境界音調と考えた。

冒頭上昇の使用は青島談話では清武談話よりも多い。大きさは清武談話とおなじく小さいものが多い。

末尾上昇の使用は青島では清武よりも少ない。また，その大きさは清武にくらべて総体的に小さく，大きさの分布の幅も狭い。このことも，青島談話が清武談話よりも平板的な話しかたであるように筆者が感じたひとつの原因であろう。また，清武では提題文節の場合，伝えたい気持ちの強さ，述語文節の直前，感嘆の気持ち・興奮にともなって大きくなる傾向が見えたが，青島では提題文節とのむすびつきは逆に薄い。しかし，伝えたい気持ちの強さや感情にともなう大きな上昇は青島でも見られた。

末尾下降は青島の男性話者に特に顕著に見られるものだが，下がりかたは小さいものが多い。大きさによる使い分けは考えにくい。

・地域性と個人性：青島談話でも清武談話でも，高さの動きが３種の音調型と境界音調から構成されるという基本構造は共通だが，境界音調の種類とその使用頻度についての違いがめだつ。境界音調の使いかたの違いは地域性の可能性がある。

青島は清武と距離的には近いが，内陸部でもともとの主たる生業が漁業（青島）か，海岸部で農業（清武）かという地域性の違いもあって，明治・大正期の生まれの話者にことばづかいの違いがあっても不思議はない。

一方，音調型の使いかたについては，青島の男性話者が平坦型を多用し，特にポーズ節の冒頭で多く，文末で少ないという使い分け傾向を示すという点で，青島の女性話者や清武の男性・女性話者と異なる。これは地域性というよりも個人的特徴の可能性がある。

・青島と清武の音調の特徴の総括：青島と清武に共通する高さの動きの特徴をまとめると，各文節はその内部で急な高さの変化をさせないという意味で「平板的」に言うことが求められるが，談話のなかでは。青島の男性話者以外それをもっぱら下降傾向で，ときには平坦に，そしてときには上昇傾向で発音し，それらの末尾や冒頭に上昇または下降を適宜つけるということになる。終助詞類と間投助詞は固有の高さの動きを持つ。青島の男性話者は平坦型が下降型と同程度に多いが，下降型のあとに平坦型は続きにくいことから，平坦型と下降型の選択はまったくランダムなものではないということが言えそうである。また，強調したり感情を込めるときには，大きな上昇型を使うか大きな冒頭上昇や末尾上昇を使う例が目につくが，文節の高低の幅をこのような形で大きくするのも特徴のひとつだと言える。

青島でも清武同様，音の高さの動きを左右する要因として意味の限定関係，フォーカス，感情がある。しかし，意味の限定関係の影響力は清武より小さく，音調型と境界音調というふたつのイントネーション要素の使いかたの自由度は清武よりもさらに高いように思われる。

文献

郡史郎(2020)『日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用』大修館書店.

郡史郎(2022)「宮崎清武町における『無アクセント方言』の談話音調」『音声言語の研究 16』（大阪大学大学院言語文化研究科）1-18. https://doi.org/10.18910/88404

国立国語研究所（編）(2008)『全国方言談話データベース　日本のふるさとことば集成』第 18 巻 福岡・大分・宮崎，国書刊行会.

比江島修一(1992)「方言」『宮崎県史 資料編 民俗２』第 12 章第３節，宮崎県.